



## 教授の呟き

### 第24回

# 消費の多様化、**“買う”おせち**

東京海洋大学教授

苦瀬博仁

#### ●●●昔の年末年始の風景

12月になると、ついつい昔の正月準備を思い出す。

子供のころ、年末の大掃除の手伝いがイヤで、何かと理由をつけては家から逃げ出していた。しかし正月用の伸しもちを、角もちに切り分ける仕事が回ってきた。つきたての柔らかいもちが切りにくく、硬くなると力があるので、切りごろを見分けなければならなかった。

もちもおせち料理も新巻きザケも、そもそもは正月に料理の手間を省くための保存食でもあった。特に昔の正月は商店も休みが長く、初荷も遅かったから、それなりに年末の準備は大変だった。母親が大晦日まで台所でおせち料理を作っていた姿を覚えている。そんな母親を見て、買い忘れないかと心配していた。

年が明けて何日か過ぎると、少しずつ生えてくるもちのカビを取り除いたり、炭で焼くときに焦げないようにと見張り番をしたりした。鏡開きをして鏡もちを食べるときには、口の中で感じる立体感に感激した。

#### ●●●技術進歩による便利な年末

最近では、もちは一片ごとにパック詰めされて売られている。カビも生えなければ、ころ合いを見計りながらもちを切り分ける必要もない。包装や温度管理や品質管理の技術進歩が、便利な生活を可能にしている。

店舗の多くは大晦日まで開いているし、年が明ければ直ちに初売りである。何か足りなくなれば、元日から開いているスーパーやコンビニに買いに行けばよい。まして手をかけて、おせち料理を作らなくても済むようになった。

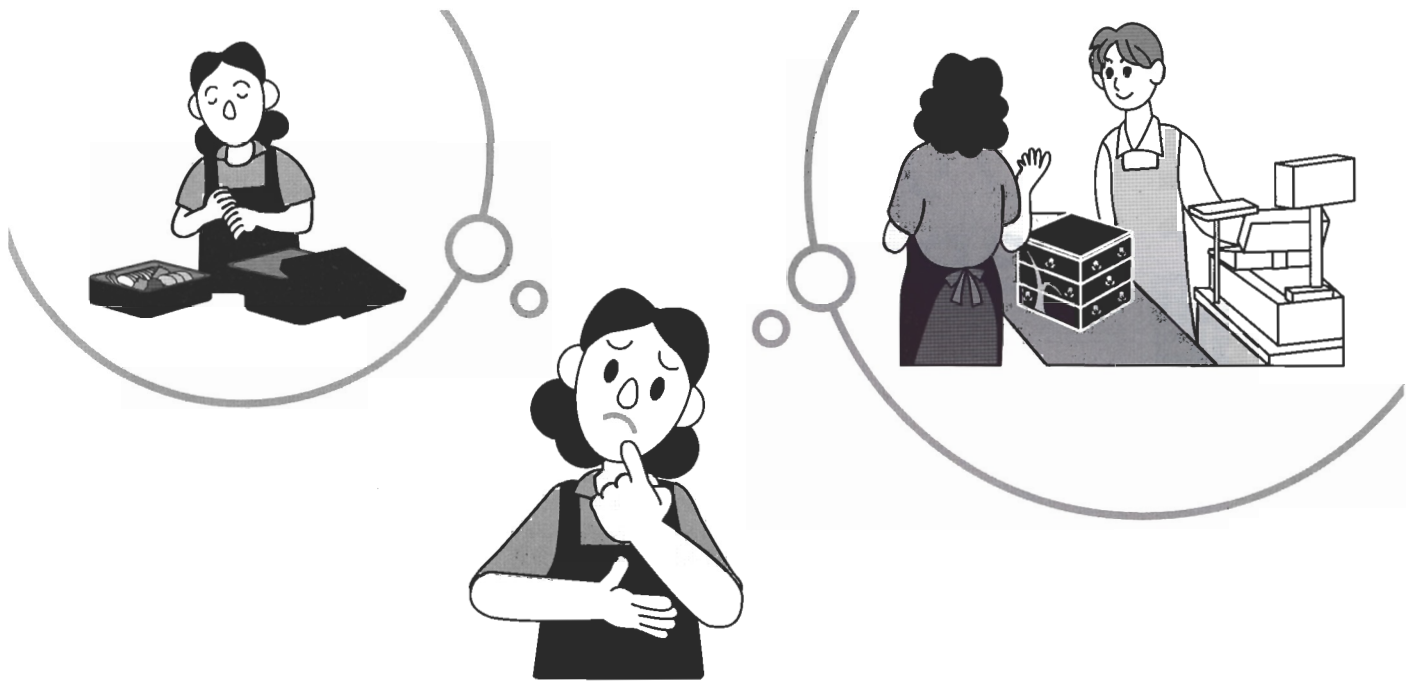
マニラに赴任していた10年前、当地の日本料理屋におせち料理を頼んだことがある。材料が十分に手に入らない異国の地だからこそ、何と少しでも「日本のお正月」を味わいたかったのである。しかし歳を重ねたせいもあるだろうが、ここ数年の年末は以前ほどの切迫感を感じない。遠くの除夜の鐘を数えながら、年が明ける緊張感に胸をときめかせることも少なくなった。

ならばいっそのこと、おせち料理を重箱ごと買って、伝統行事さえも簡単に済ましてしまえば、忙しい年末をのんびり過ごすことができるはずである。

#### ●●●“買う”おせち、百花繚乱<sup>(1)</sup>

最近では「買う」おせちがはまっている。一部の百貨店やスーパーでは、10月下旬から「おせち料理」の予約受付を始めているそうである。

これには物流技術の進歩もさることながら、社会構造の変化による消費生活の高度化が大きく影響している。核家族や単身世帯の増加は、小分けされた商品を必要とし、女性の社会進出は家事の外部化を促進してきた。自ら料理するよりも、総菜を



買ったり食事に出かけるように、家庭の中でも「生産の外部化」が進んだ。多様な消費生活に適合するために、加工された付加価値の高い商品や外食のニーズも増えたのである。

年末まで忙しく働く女性が多くなれば、おせち料理の販売需要増加も納得できる。

加えて消費生活の多様化に伴い、デパートや老舗料亭の高級おせちから、スーパーのお手ごろ品まで出そろうようになった。高級志向やブランド志向もあれば、中華や洋食のおせちもあるそうだ。少し寂しい話になるが、1人前のおせちも売っているそうである。

●●● **それでも気になる習慣やしきたり** ●●●

「買うおせち」は、いかにも手抜きをしているようで、気恥ずかしい面がないわけではない。しかし習

慣やしきたりに目をつぶってでも、のんびりと年末を過ごしたいのなら、別である。消費生活の高度化による商品の高付加価値化の恩恵を最大限に生かし、出来合いの品で正月準備を簡単に済ませることもひとつの方法だろう。

一方で、ゆく年の心と身体のススを払い、くる年を厳かな気分で迎えるために、生活の節目を形にしたい気持ちもある。となれば、多少の煩わしさと慌ただしさを覚悟しつつも、

習慣やしきたりに従って念入りに正月準備をすべきだろう。

便利さと手軽さには甘えたいし、老舗の味にも引かれるが、伝統も捨てがたい。

小生の領分ではないが、うまい具合に折り合いをつけることを期待している。

- (1) 榊聡美：「“買う”おせち 百花繚乱」、産経新聞、2004年10月20日23面
- (2) 苦瀬博仁：「付加価値創造のロジスティクス」、pp31-40、税務経理協会、1999

**Profile**

東京海洋大学 海洋工学部  
流通情報工学科 教授

**苦瀬博仁**

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授。94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長を経て、04年4月より評議員。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(兼任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)

